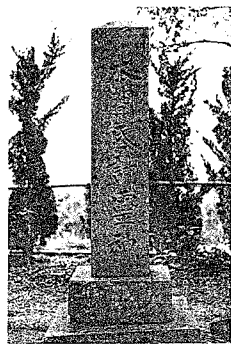


越後の風土を見つめ続けた博学者・小泉蒼軒

●本名は、本間氏計

蒼軒の父其明は、宝暦十一年（一七六一）に二代本間作十郎の子として新潟に生まれましたが、年少のころ小泉家に養われたことから小泉姓を名乗るようになり、この「小泉」姓は、明治三年に蒼軒が本間に復姓するまで名乗られています。

「蒼軒」という号も、彼の数多い号のひとつで、本名は氏計。弘化三年の「蒼軒遺録」に、「新発田諏訪神社の神主に勧められて住んだ庵の軒端に、何本かの松の木が立っていたので、我が仮住まいを蒼軒と名づけた」と号の由来が記されています。



本間氏計（小泉蒼軒）の墓



小泉其明の墓



晩年の本間氏計（小泉蒼軒）肖像

藩に仕えながら地誌研究

蒼軒の新発田藩での役職は、行政統治組織の末端、つまり農民を管理する組頭や名主でした。当時の藩が用いていた名主の転帖という独自の行政手法により、蒼軒も、たびたび転勤を繰り返しています。

文政十一年の三条大地震での働きにより中之島組大保村の同前組頭に父子勤務を命じられたことにはじまり、四十一歳で天保国絵図下調べの功により同組坂井新田の名主に昇格、以後小須戸組市之瀬新田などの名主を勤めました。

その一方で、天職ともいえる地誌研究に情熱を傾けました。越後全図を出版した父其明の志を継ぎ、「越後志」（越後の地理と歴史）編纂を目標に越後各地に何度も大掛かりな測量旅行を行っています。また常に幅広い視野を持ち、県内外の情報を敏感に受け止め書き遺しています。

しかし完成への道のりは遠かったようです。越後地誌の集大成である越後志完成の念願は遂に果たせませんでした。越後志（村落部）、「越後志料」、「越後志草稿」、「越後地誌」など多くの地誌類を遺しています。

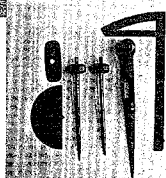
多才な業績と、各地の文人との交流

蒼軒が著述・記録したものは、単に越佐の地理にとどまらず、歴史・国学、民政、測量学、治水、民俗など多岐にわたる事柄を、恵まれた文才で随筆としてまとめています。これら「蒼軒文庫」と測量器具一式は平成五年一月、新潟市の文化財に指定されました。

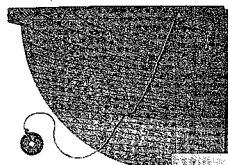
生来鋭敏、博覧強記として評判のあった蒼軒は、あらゆる學問に通じていました。その向学心の強さから、滝沢馬琴や鈴木重胤、巻菱湖、頼支峰、丹羽思亭、桂蒼正・蒼重父子など、多くの文人学士との交友を温めています。

桂父子とは、大庄屋と名主という職掌上の垣根を越えた親密な関係で学問上の意見を交わしていたようです。特に蒼重から蒼軒へ宛てた書簡はおよそ三百通にもなります。

旺盛な好奇心と多様な学識を合わせた蒼軒。その何十年にもわたる日記は、幕末の変動期に、郷土と密接に生きた貴重な記録として、研究者からの注目を集めています。また、彼の個人的な事柄や身辺のニュースなどもいさゝと描かれ、当時の人々の生活の様子をほうふつとさせます。



蒼軒使用の測量器具



蒼軒使用の測量器具

推称のことば

◆小村式先生（新潟県立歴史博物館）

小泉蒼軒が、地理学・民俗学等にすぐれ、また克明な情報収集と記録によつて当時のみならず、現代にも多大の寄与をなしていることは多くの人の知るところである。

また新発田藩領坂井新田・曾根新田、市之瀬新田等の名主を勤めた関係で民政に詳しく、安政六年（一八五九）「北越新発田領農年中行事 山田のそと」慶応二年（一八六六）「両組産業開拓の巻」を著し、補作を始めその他の農作物の栽培に関する事項、農民の農閑余業の実態を詳記し、藩の産業政策に資した。また藩令として渡島一揆最中の民衆の動きや奉行所での政治の実態を報告し、「佐川騒動志」を著した。晩年戊辰戦争に際会するや、東西両軍の動き、長岡政防の戦局の展開、その他戦争をめぐる風聞の数々を詳細に記録し「戊辰騒動記」及び戦乱記を著した。

私は、昭和三十年ごろ、県立図書館に寄託されていた蒼軒遺書「小泉文庫」を吉田春太郎氏の御案内を頂きつつ拝見したが、その膨大な、克明さに驚嘆し、若十を在郷町の研究に利用させて頂いた。しかし、かかる驚くべき著作を重ねた蒼軒その人の全体像については関心を抱きつつも果すことがなかった。

石川新一郎氏とは「新潟市史」編纂を機に呢懇を頂き、その深い郷土愛、微細を尽した郷土調査に敬服して年代順に編集翻訳し、一六〇〇ページに及ぶ大著を作成された。これによつてわれわれは、蒼軒の行実を通してその人柄の全貌が当時の世相、町村の様子等を具体的に知る事ができる。幕末期地方史研究に貴重な資料を提供された氏の労を多とするとともにこれを推称するものである。